

表 題：お米の一大産地 - 東北 -

概 要：平成 12 年産水稻の産地品種別収穫量（農林水産省統計情報部、平成 13 年 3 月 14 日公表）のデータを用いて、東北の稲作がわが国における米の生産量に占める重要度を紹介する。

東北の稲作は冷害との戦いといっても過言ではない。昭和 6 年、7 年、9 年、10 年と続いた冷害は東北地域はもちろん、全国的に深刻な社会的影響を及ぼした。この冷害を契機に、近代的な冷害研究がわが国で一斉に始まった。これらの成果は着実に現れてきている。すなわち、明治、大正時代には東北地域の収量はきわめて低かったが、昭和 25 年頃になると、山形県の収量が全国第 3 位に躍進し、岩手県や宮城県の収量も全国平均に近づいてきた。そして平成 2 年になると、秋田、山形、青森の 3 県が全国の 1 から 3 位、トップ 3 を独占し、岩手、福島、宮城の 3 県もベスト 10 入りを果たした。現在、東北地域の稲作は作付面積で全国の約 26%、玄米の生産量では約 27% となり、一大産地といえる。この輝かしい米作りの躍進は、元青森県農業試験場長であり、数々の耐冷性品種を育成した田中稔さんの言葉をお借りると、生産者、行政普及関係者、研究者、民間など多方面の農業関係者の稲作改良にかけた情熱と努力、そして関係者の相互交流の結晶であるといえる。これら関係者は東北の気象条件そのものを変えたのではない。変えたのは稲作技術なのである。

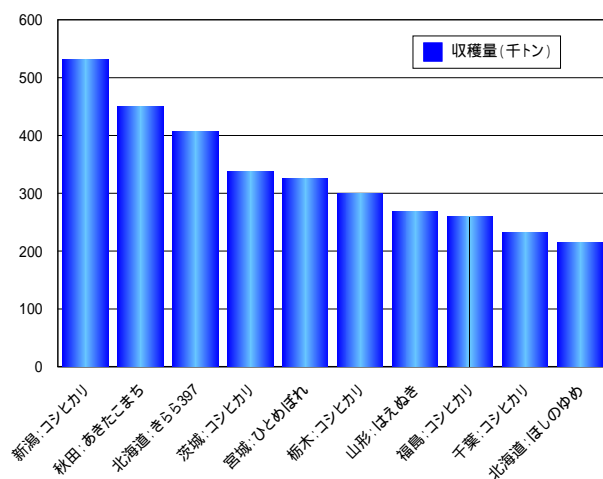


図1 平成12年産水稻の産地品種別収穫量(上位10産地品種)  
平成13年3月14日農林水産省統計情報部公表。  
平成12年産水稻の産地品種別収穫量から作成。

さて、東北の稲作の現状を平成 12 年産米のデータで概観する。図 1 に上位 10 産地品種の収穫量を示す。これら 10 産地品種の合計の収穫量は全国の収穫量の 35.1% を占める。産地名をみると、北海道、東北の秋田・宮城・山形・福島、関東の茨城・栃木・千葉、そして北陸の新潟となっている。品種名でみると、北海道の「きらら 397」「ほしのゆめ」、全国に広く作られている「コシヒカリ」、秋田の「あきたこまち」、宮城の「ひとめぼれ」、山

形の「はえぬき」となる。

「きらら 397」「ほしのゆめ」は北海道の収穫量のそれぞれ 56%、29%を占める。

「コシヒカリ」はそれぞれの県の収穫量に対して、新潟では 81%、茨城 79%、栃木 79%、福島 58%、千葉 67%を占める。

「あきたこまち」は秋田県の収穫量の 82%を占める。

「ひとめぼれ」は宮城県の収穫量の 71%を占める。

「はえぬき」は山形県の収穫量の 60%を占める。

なお、上位 10 産地品種の収穫量が全国の収穫量に占める割合は図 2 の通りである。

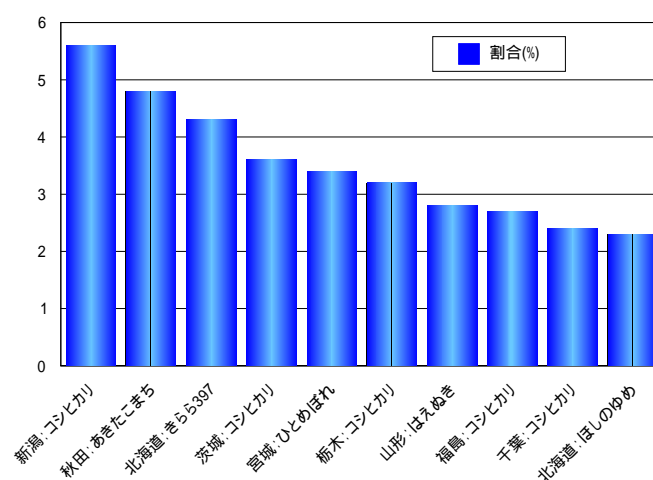


図2 平成12年産水稻の産地品種別収穫割合(上位10産地品種)  
平成13年3月14日農林水産省統計情報部公表。  
平成12年産水稻の産地品種別収穫量から作成。

もう一つ注目すべきは、日本海側の秋田、山形と新潟の3県を除くと、北海道、東北、関東のこれら産地は冷害の危険度の高い地域といえる。したがって、冷害になると、これら産地の収穫量が減り、わが国の米の需給が大きく影響されるのである。